

北口本宮富士浅間神社

北口本宮富士浅間神社は、富士山の山頂につながる吉田登山道の北口にある本宮です。この神社は、何世紀にもわたり江戸（現在の東京）から到着した巡礼者の大半が登山を開始した地点です。

この神社の起源は、伝説の王子、日本武尊が東征の際に近隣の丘に登り富士山に敬意を表した110年にさかのぼり、この神社は788年に現在地に建立されました。17・18世紀には、富士講信仰が爆発的に普及し、江戸からこの神社を目指す新たな巡礼者の波が押し寄せました。この神社の建築物の大半はこの時代にさかのぼるものです。

巨大な松の古木が立ち並ぶ参道の向こうには、「三国第一山」と書かれた額を掲げる堂々たる鳥居があります。この「三国」とは、日本、中国とインドのことで、古代の日本が知る世界はこの3つの国のみからなるものでした。この鳥居には、神社への入り口だけでなく、富士山への入り口でもあると書かれています。

3 棟の本殿

現在の本殿に並んで、この境内には以前の本殿が2棟建っています。最古のものは、1223年に鎌倉幕府の第2代執権、北条義時（1163–1224）によって建てられました。1561年には、この本殿は大名、武田信玄（1521–1573）から神社に寄贈されました。それより新しく広い本殿が、豊臣秀吉が武力によって全国を統一してから10年も経たないうちに秀吉の間接的な資金援助を受けて1594年に建立されました。最も大きく広い本殿は、その御代が江戸時代（1603–1868）の平和と安定をもたらした、将軍徳川家康（1543–1616）の家臣が1615年に寄進したものです。

この神社のもうひとつの珍しい特徴は、建物の裏の奥まったところに日本の繁栄の神、恵比寿と大黒天を祀っていることです。この祠で祈るためには、参拝者は背中を富士山に向ける必要があり、これは浅間神社としては珍しい参拝方法です。この位置は、2柱の神様が永遠に富士山を見ることができるよう選ばれたのかもしれませんが。